

インターネットを含むマルチメディアを利用した 独自教材の作成

吉田 国子

筆者は、2001年度入学生までの必修科目である「Media English (時事英語)」において、従来型のLL教室に設置されている機器に加えて、学内ネットワーク、CAIソフト、パソコン端末、インターネットなど、横浜キャンパスのLL教室に設置されている機器を活用して独自教材を作成し、その教材を使って授業を行った。本稿では、その様子を具体例と共に紹介し、こうした試みの今後について学生の声を交えて考察する。

キーワード：Media English, インターネット, マルチメディア, 独自教材, Learner Autonomy

1 語学教育をめぐる潮流

1.1 学生の主体的学習を促す授業

近年語学教育のなかで重要視されるようになってきている考え方に、Learner Autonomy がある。これは、学習者が自己の学習に責任を持ち、主体的に学習に取り組んでいくことを意味し、語学教育は究極的にはその目標に向かって行われるべきだという主張である。Learner Autonomy には Learning Strategies (学習方略, 各人の学習の進め方) と Learner Attitudes and Motivation (学習に対する動機付けや態度) の二点が深くかかわっている。Dickinson によると、主体的な学習者は以下の特徴を持つ。1. 自分が何を学んでいるのか、なぜその課題を学ぶ必要があるのか理解できる 2. 学習の目標を自分で設定できる 3. 適切な学習方略を選び、学習を進めることができる 4. 自分がどの学習方略を使って、どのように学んでいるのかわかる 5. 自分の学習そのものの良し悪しを判断することができる。(Dickinson, 1993)

筆者は、多くの学生にとって最後の学校教育になるであろう大学での英語教育にこの Learner Autonomy の視点を取り入れ、主体的な学習者への第一歩を踏み出せるような授業を展開したいと考えてきた。そこで、学生の興味を喚起する材料を提供する、何を学ぶのか目標を明確にする、学生が自ら作業する時間を多くとる、の3点に特に留意して授業を行うこととした。

1.2 インターネットの語学教育利用

インターネットは言うまでも無く、世界各国の情報に手軽にアクセスできる手段のひとつである。その言語が

話されている国のナマの情報を瞬時に得られるため、使い次第で優れた教材になりえる。横浜キャンパスのLL教室では、学生用コンピュータからインターネットへ自由にアクセスできる。これは筆者が2001年と2002年に担当した時事英語のような科目を教える際には、特に大きなメリットである。

ニュースを授業の教材として使う際に直面する困難に、教科書の選定がある。英字新聞を題材にした教科書は数多く出版されているが、情報は必ずしも新しくない。出版までどんなに早くても1年はかかるため、教科書用に編集されたニュース記事はもはやニュースではなく、学生の興味を惹きつけ、持続させることは大変難しい。だがインターネット上のマスコミ各社のウェブサイトに掲載されているニュースを利用すると、今起こっていることに関するニュースが簡単に入手できる。活字版の英字新聞から記事を選んでコピーし、学生に読ませることも新しい素材を使う方法ではあるが、それでもやはりインターネットを利用する方法のほうが学生の理解を深める上で優れている。

わが学部の学生を含めて、多くの日本の大学生にとって、英字新聞は決して簡単に読めるものではない。文法力、単語力、そして背景知識が足りないことが読めない理由として考えられる。辞書を引く、教師が解説するなどして、文法と単語面での困難が解決しても、背景知識の不足は、それを補うリソース無しでは解決し得ない。例えば、イスラエルで起きたパレスチナ人によるバス爆破事件の新聞記事をクラスで読んだとしよう。学生は「イスラエル」という国で「パレスチナ人」が「自爆テロ」を実行して多数の犠牲者がでた、という事実はわかるかもしれない。しかしカッコ内のキーワードをはじめとして、パレスチナ紛争についての基礎的な知識が無いと、その事件が真に意味するものは何かわからない。当然のことながら新聞記事には、その解説はされていない。

インターネットにアクセスできる環境で授業を行うと、この問題は容易に解決する。学生はキーワードを頼りに検索し、必要な情報をインターネット上から集め、場合によっては互いに教え合い、記事内容の理解を深めることができる。

2 マルチメディア利用の独自教材

2.1 授業の概要

筆者は 2001 年度と 2002 年度の前期、Media English (時事英語) を担当した。これは 2 年生に配当された必修科目で、週に 2 回授業がある。履修者は一クラス約 35 名であった。この授業では、目標を「英字新聞の見出しの特徴を理解し、見出しとリードからニュースの概要をつかむことができるようにする」とした。英字新聞を主に取り上げることにしたのは、学生が卒業して社会に出た時、情報の収集元として英字新聞を利用することがあるだろうと思われるからだ。そしてその中で特に見出しの読み方を指導の中心に置いたのは、見出しがわからないと新聞を効率的に読めないこと、そして見出しを読みこなす力をつけることによって、少しでも英字新聞を身近に感じられるようになるのではないかと、思ったことにある。

新聞記事の見出しは、普通の英文とは少し異なった文体で書かれているため、学校英語のみしか知らない学生の目には、解読できない代物と映るようだ。そこでまず以下の見出しの語法を、ウェブサイト上に掲載されたニュースを用いて詳細にわたり学ぶこととした。

1. 英字新聞の見出しの文法 (be 動詞の省略, 時制, 過去分詞の使い方)
2. 頭文字語 (略語)
3. カンマ , の使い方
4. コロン : の使い方
5. セミコロン ; の使い方
6. 引用符 “ ” の使い方
7. その他, 見出しの特徴

(スペースを少なくするための工夫)

またこれに加えて、リードの構造 5W 1H, 修飾表現, 情報源の表し方についても学習し、記事を読みこなす力の増進を図った。

授業で使う教材は、マスコミ各社のウェブサイトから筆者が選び、練習問題等をつけ、ワードファイル形式で保存し、CAI ソフトを通して、学生のホームディレクトリへ配布した。

2.2 使用教材例

教材用のリソースとして多く利用したのは、各国の通信社のサイト (<http://www.upi.com/> , <http://www.reuters.com/> , <http://www.kyodo.co.jp/> ,



図1 共同通信社のウェブサイト



図2 Japan Times のウェブサイト

など) や国内外の新聞社のサイト (<http://www.nytimes.com/>, <http://www.usatoday.com/>, <http://www.japantimes.co.jp/> など) である。(図1, 2) 図3は実際に配布した教材の一例である。この日の学習項目である、引用符付きの見出しを持つ記事を題材としている。(Japan demands results from North Korea on 'missing', Pyongyang blasts Ishihara 'war' cry, などの記事)。学生は配布された記事を読み、引用符の役割を考え、教師の概説を聞いた後に、この記事の背景にあるものを各自調べるといった作業に移った。

2.3 背景知識の共有

前述の記事の理解には、「北朝鮮」「日朝国交正常化」「日本人拉致問題」「南北朝鮮問題」「北朝鮮の核疑惑」などの予備知識が必要である。そこで筆者が語学面でのポイントを解説した後、学生は各自のパソコンから検索をかけ、記事理解に役に立つと思われる情報を探した。他の学生にも読んでもらいたいサイトを見つけた場合、ネットワ

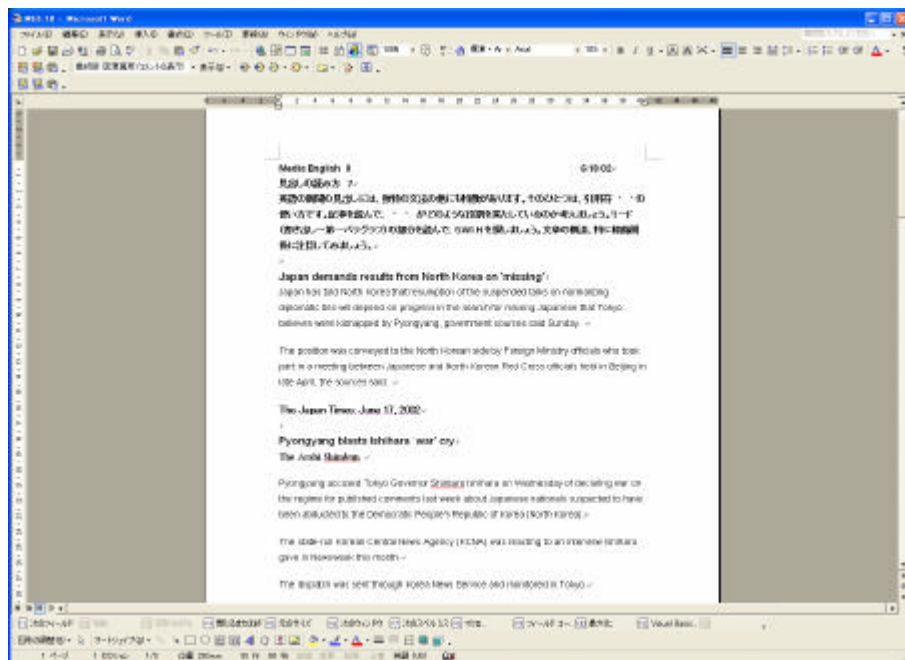


図3 ハンドアウト例1

ーク上の共有ドライブ（Xドライブ）に置いたメモ帳にアドレスを書き込み、情報が共有できるようにした。

学生が検索に多用したサイトは、Google, Exicte, Yahoo, Goo, RNN 時事英語辞典, 共同通信社, 時事通信社, ABCNewsCom, アサヒコム, 外務省のホームページ, など、この記事に関して学生が選んだサイトは次のようなものである。

http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/n_korea/,
<http://dprk.yellowbirds.org/>
<http://news.goo.ne.jp/news/topics/index/00514/1.html>
<http://news.fs.biglobe.ne.jp/special/kita.html>
<http://www.asahi.com/national/abductees/abductee.html>

2.4 インターネット以外のメディア利用の教材

上記のトピックについて、前述のインターネット利用の教材のほかに、別のメディアからもたらされるニュースも授業で扱った。6月25日が朝鮮戦争の勃発した記念日であり、休戦から今年で50年経つため、記念日の前後1週間ほどは、CNN テレビがアジアのニュースのなかで朝鮮戦争関連のニュースをしばしば報道していた。その中からひとつを選んで録画し、リスニング用練習問題をつけて提示し（図4）、発展学習として南北朝鮮問題の原点について理解を深めることを目指した。

3 今後へ向けて

3.1 学生の感想

このようなスタイルの授業を半期間続けたが、当事者の学生はどのように思ったのであろうか。各年度とも、授業終了時にいくつかの設問に自由に答えてもらうアンケートを課し、学生の感想を調べた。ここでは2002年度の学生の声を紹介する。無記名式で回答数は34名、詳細は以下のとおりである。

まずネットに掲載されている記事を教材として使う是非について尋ねた。これには全員が肯定的な感想を残した。その理由として最も多かったのが、即時性であった。「ホットな話題なので興味がわく」、「最近のニュースなので中身を予想しやすい」、「簡潔でわかりやすい」、などの意見が多く聞かれた。また、ネット上の素材であることの良し悪しとは直接関係は無いが、「時事問題を知らないのためになった」という感想も多かった。さらに少数ではあるが、「プリントアウトされている新聞記事も読みたかった」、「他のニュース雑誌では同じトピックがどう書かれているのか、読み比べたかった」という声もあった。

続いて、記事理解のための背景知識をインターネットで調べることにについて、感想を尋ねた。回答は、「調べたいことがその場ですぐに調べられるからよい」という意見が圧倒的多数を占めていた。他の意見としては、「視覚的な情報も得られるのでわかりやすい」、「人それぞれ、自分のペースでできるからよい」、「わからないことが短時間でわかるので、授業時間を有効に使える」、「自分で調べる習慣が身につく」、「授業が堅苦しい雰囲気にならな

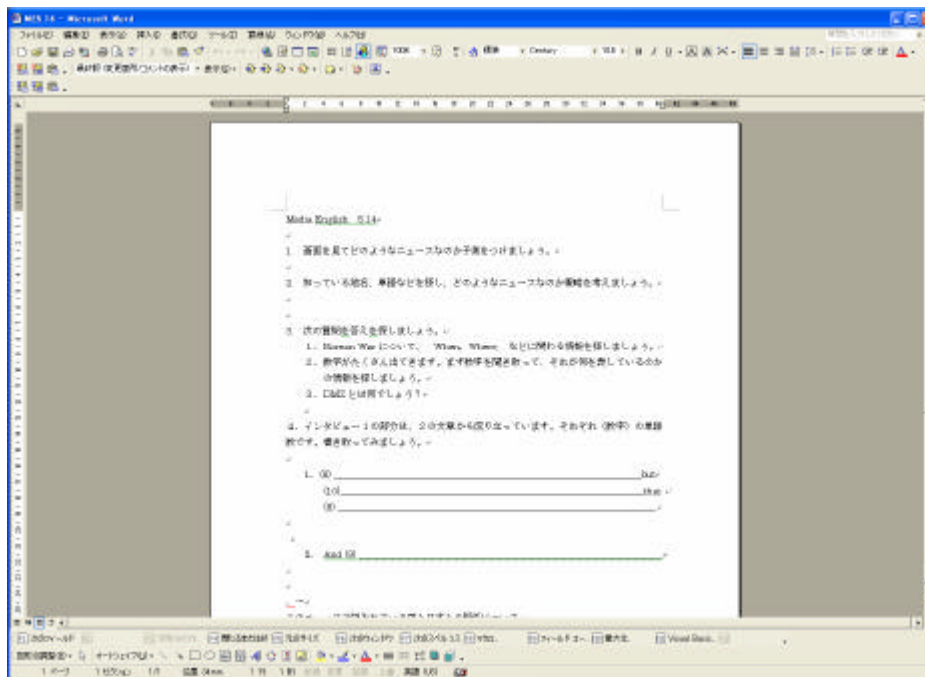


図4 ハンドアウト例2

いので、参加しやすい」、などがあつた。一方、「便利ではある反面、気をつけないと関係ないサイトへついつい遊びに行ってしまう」、や「緊張感が持続しない」といったセルフコントロールの必要性を指摘する声も聞かれた。また、「検索もヒットしないと中途半端な調べ方で終わってしまう」という意見もあつた。

最後に全体的な感想を尋ねたところ、授業が終わってから、時々英字新聞を読んでみるつもり、と答えた学生が数人いた。彼らが今でも実際読んでいるかどうかは知る由もないが、少なくとも、自主的な学習者への小さなステップを踏み出したと言えるだろう。筆者はこの経験を踏まえて、今後も独自教材の開発に取り組んでいきたいと思う。

参考文献

Benson P & Voller P (1997) *Autonomy and Independence in Language Learning* London: Longman
 Dickinson, L (1993) "Talking shop: aspects of autonomous learning" *ELT Journal* October 47/4
 Thanasoulas, D (2002) *What is Learner Autonomy and How Can it Be Fostered?*
<http://www3.telus./linguisticsissues/learnerautonomy.html>